II－550　家庭における新聞紙処分方法の特性の認知が処分方法に対する態度に与える影響

京都大学工学部　山川　肇
京都大学工学部　寺島　泰

１．はじめに

昨今のごみ問題を背景として、これからの廃棄物管理はますます減量・再資源化を求められている。しかし適切な減量・再資源化政策を行うには消費者の資源分別行動についての理解が不可欠であるが、これについての研究はまだ十分とは言えない。本研究では家計の新聞紙処分行動について質問紙による調査を行い、分別・ごみ処分行動とこれに影響を与えている因子についてさまざまな角度から分析を行った。ここでは特に各処分方法のどのような特性の認知がその処分方法に対する態度に影響を与えるのかについて検討した結果を報告する。

２．調査の概要

(1) 調査地域及び調査対象

本調査では、調査地域として大阪府Ｈ市内の公務員宿舎とその近接地域から４自治会を選んだ。調査対象はその地域の世帯とし、回答者は普段から新聞紙の処分に携わっている人にお願いした。

標本抽出は500世帯を、先に述べた４自治会に対しその世帯数に比例して配分したのち無作為抽出した。

(2) 調査期間及び調査方法

調査は1993年1月16日に調査票を配布、20日に回収した。その際、留守宅及び未記入の家庭には郵送で送ってもらうよう依頼し、1月31日にて締め切った。有効回収数は183票で全標本数の36.6％であった。

(3) 調査内容

調査の内容は、①　回答者及び家計の人口統計的、社会経済的あるいは心理的特性などの諸特性、②　新聞紙の処分状況、③　新聞紙の処分方法の選択に関する認知・態度・規範・行動意図、④　処分方法の差の金銭評価額、などにわたった。

態度は、基本的にごみ収集、集団回収、ちり紙交換の３つの処分方法に対して、よい－悪い、簡単－面倒、有益－有害の３項目につきそれぞれ５点尺度に回答してもらいこれを合計することで定量化した。

３．調査結果と考察

各処分方法の特性について５点尺度で答えてもらい、そのデータを平均した値をプロットしたものが図１である。一般に上にいくほど好ましく、下にいくほど好ましくないようにプロットしてある。

まず、集団回収とちり紙交換の２つのリサイクルがほぼ同様の値をとっているのに対して、ごみ収集は０線を軸にほぼ線対称の形状をしている傾向が認められる。すなわち全体

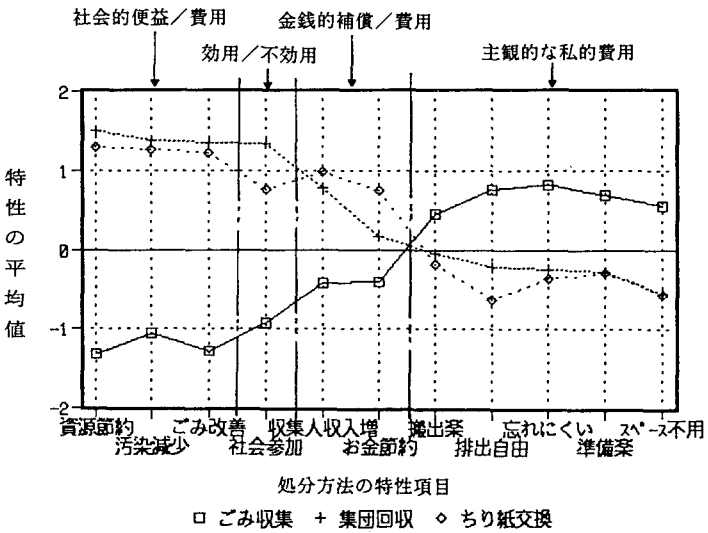

図１ 各処分方法の特性の平均値

でみると、リサイクルとごみ収集をほぼ逆のものとして捉えていると言える。

次にここで取り上げた資源節約からスペース不用までの11項目を以下の４項目に分類する。①資源節約、汚染の減少、ごみ問題の改善を社会的便益・費用項目、②社会参加を個人的効用・不効用項目、③収集人の収入増加、家のお金の節約を金銭的補償・費用項目、④搬出の楽さ、排出の自由さ、忘れにくさ、準備の楽さ、スペース不用を主観的な私的費用の大小、とする。

このとき主観的な私的費用については相対的にリサイクルに障害となっているが、その他についてはリサイクルの誘引となっている。特に社会的便益・費用項目の平均値は非常に高い値で、この点をこれ以上改善するのは困難ではないかと推測され、今後は主観的私的費用の改善が重要になると思われる。

さらにこれらの処分方法の特性と態度との間で分散分析を行った結果、11項目すべてがいずれかの処分方法に対する態度と有意な関係を示した。その関係を示したのが図２である。

この図から、ごみ収集・集団回収が先の４分類のうち３分類ですべて有意となっているのに対して、ちり紙交換はほとんどの項目と有意でないということがわかる。これがそもそもちり紙交換はここに挙げたような認知特性の影響を受けないのか、それとも本調査サンプルがほとんどちり紙交換を利用しない(一番最近について尋ねた問で3.4％)ことからくるものなのか、あるいは他の理由によるのかを明らかにするのは今後の課題である。

また、社会的便益・費用項目及び私的効用・不効用項目についてはごみ収集および集団回収と有意な関係があることがわかる。

一方、主観的私的費用因子は集団回収ではすべて１％レベルで有意である一方、ごみ収集の方ではすべて有意でないという結果となっている。これはごみ捨ての費用はごみ収集に対する態度に影響しないが、集団回収の費用は集団回収に対する態度に影響するということを意味する。

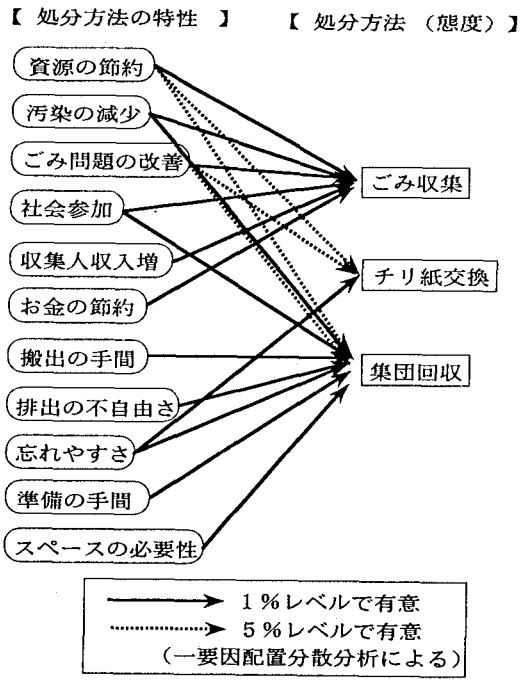

図２ 分散分析による特性と態度との関係

この費用項目の中には分別・保管費用と排出費用があるが、この両者に平均値、分散分析のいずれにも差が表れなかった。これらのことから分別・保管、排出のいずれか一方がネックというわけではなく、ともに有意に影響していることがわかる。

４．結論

(1) リサイクルとごみ収集はさまざまな点でほぼ正反対の性質をもつものと捉えられている。

(2) 平均でみて主観的な私的費用のみが相対的にも絶対的にもリサイクルの障害となっており、態度との関係でみても集団回収についてはその主観的私的費用の全ての項目について有意に影響があり、今後さらにリサイクルを進める上では、この点がポイントとなるだろう。

(3) 主観的な私的費用においては分別・保管、排出のいずれか一方がネックというわけではなく、ともに有意に影響している。

(4) 社会的便益・費用項目、私的効用・不効用項目についてはごみ収集、集団回収と有意な関係がある。